

クランストウン著

## 『ジョン・ロック 一つの傳記』

Cranston, Maurice: John Locke, A Biography.  
London, 1957. xvi, 496 pp. 9 illustrations.

## 中村恒矩

今世紀特に第二次世界大戦前後の時期から今日に至るまで、十七世紀イギリスの社會と文化について意欲的な研究が集積されてきたが、この事情はジョン・ロック (John Locke, 1632—1704) 研究においても例外であるとはいえない。しかしことロックの生涯にわたる傳記敘述に關する限り、その資料の發掘と研究が非常に進展しているにも拘らず、約八十年前フォクス・ブーン (Fox Bourne, H. R. 1837—1909) によつて書かれた「ジョン・ロック傳」(The Life of John Locke, 2 vols Lond. 1876) が依然としてオーセンティックなロック傳とされてきた。本來思想はその土壤たる歴史的社會の状況やその思想家の生活を無視しては、意味の理解され難いものではあるが、思想家の内には論理明確で各著作の内的關連も判然としており、従つてそれらの著作を辿ることによつてともかくその思想が理解せられ、傳記等の助けを餘り必要としない人々と、公刊された著作からだけでは種々の理由でその思想の理解が困難な人々とがある。ロックはむしろ後者のタイプに屬する思想家であ

あり、彼の生活や思想の形成發展について多くの疑問があった。従つてこの理由からしても新しい傳記が一層待望されていた。ところが一昨年クランストウンのこの傳記が出版され、我々は新しく公開された資料、さらにそれについての諸研究をふまえたロック傳を初めて得ることになった。ではまずこの書物の資料的側面について瞥見しよう。

一七〇四年ロックはその死に當つて三千冊を超える蔵書の約半分とマニユスク립トおよび書簡のすべてを従兄弟の子にあたるピーター・キング (Peter King, 1st Lord, 1669—1734) に託した。このコレクションが代々キング家に引繼がれてきたが、七代目のピーター・キング (1776—1833) がこれ——このコレクションは彼の子息がラヴレイス伯となつたため、今日ラヴレイス・コレクション (Lovelace Collection) と呼ばれている——に含まれているマニユスク립トと書簡の一部を用ひて「ジョンロック傳」(The Life of John Locke, with Extracts from his Correspondence, Journals, and Common Place Books, Lond. 1829) を刊行した。この書物によつてそれまで一般に知られていなかったこのコレクションの一部が初めて公開されたわけであるが、この全貌が明らかとなつた現在では、この書物も相當厳しい批判を浴びている。例えばライデンは「彼のラヴレイス・コレクションの使用は完全さからは程遠く、彼の與えた情報は多くの場合不正確だつた」と述べているし、クランストウンも次のように評している。「キング卿のロック傳は不幸にも良いものではなかつた。彼はさした

る注意もせず又方法もなく、どちらかといえば読みやすいロックのマニエスクリプトを寫し、でたらめな順番に並べて出版した。ところがロックの読みやすい作品はしばしば興味をうすめるのである。<sup>(5)</sup>

さてその後一九四七年オクスファードのボドリ圖書館によってこのコレクションが購入されるに至るまで、八冊の書物によってその極く一部分が出版されたが、他は未公開のままであった。従ってブーンもラヴィス・コレクションに關する限りは、キングの書物以外には知ることができなかった。(ブーン)の著作の資料上の特色はむしろこのコレクション以外の新資料を見出し、それを厳しく検討することに努力したところにあるといえよう。<sup>(6)</sup>

かくてロックの死後二世紀半を経て、他の資料が散逸したり利用しつくされてしまった現在、「一般に知られていない豊富な資料」を有するという「唯一の價值」を擔うのがこのラヴィス・コレクションなのである。これに含まれている書簡は約三千通、マニエスクリプトも一千有餘の數に達しており、それぞれその内容においても豊かなものを多く有してゐる。<sup>(7)</sup>このコレクションの考證・整理に當つたライデンは「ロックの傳記は訂正・擴大されうるのみならず、新資料に基いて書き變ぢられよう」といったが、克蘭ストンのこの著作はそれに應えた最初の作品であり、他の第一次的および第二次的資料の適切な驅使もさることなからまさしく「ラヴィス・コレクションに於いての八年間のたゆまぬ研究のみごとな成果」<sup>(8)</sup>といふよう。

(1) 書名をいちいちあげるまでもなく、例えばガフ (Gough, J. W.)・ラスレット (Laslett, P.)・ライデン (Leyden, W. von)・ヨルトン (Yolton, J. W.) 等の諸研究を想起していただきたい。

(2) ロックの死後今日に至るまで出版されたロックの傳記は、克蘭ストンの著作を除いても主要なものだけで十指を屈する。これらは二群にわけることができ、第一群はいわばロック傳の先驅ともいふべきものでコスト (Coste, Pierre 1668—1748)・ヤルクワート (Leclerc, Jean 1657—1736) 等、ロックに接した同時代者の回想およびそれらに基づく傳記である。第二群は本文中に記したキング・ブーン)の著作およびそれらに基づく傳記である。

(3) 彼の半分はメイシャム夫人 (Lady Masham) に渡されたが、これは一七六二年から一九一六年の間に散逸した。なおこの King Society については次を参照せられた。Harrison, J. R. & Laslett, P.: The Library of John Locke (The Times Literary Supplement, Dec. 27, 1957)

(4) Leyden, W. von: His Introduction to John Locke's "Essays on the Law of Nature" Oxf. 1954.

(5) Cranston, M.: John Locke, A Biography p. ix

(6) Cf. Leyden: op. cit., pp. 5—6.

(7) Leyden: op. cit., p. 6

(8) ラヴィス・コレクション全般についての簡明な解説

は、前掲のライデンの序論のIであり、これを参照された。

(9) Leyden: op. cit. p. 2.

(10) The Times Literary Supplement, July 12, 1957. つぎにクラストゥンの書いたロック像の要點を従來のそれと異つてるところを中心のみてみよう。

クラストゥンは全體を二六章に分ち、ロックの生涯七二年間をほぼ同様の緻密さで書いており(従來は資料の關係もあつてとかくロックの後年に偏りがちであつた)、彼の主要著作も簡潔にして要を得て説明されている。又一六七二年から一六九八年にかけてのロックの肖像畫五枚を含む寫眞版は、ロックの生活を知るうえで傳記の敘述を補つてくれる。

一六三二年ビュアリタンの産業階級の家系に、下級法律家を父として生れたジョン・ロックは、十七世紀前半のイギリス社會の文字通り「嵐」の中で成長する。彼の幼少年期に當つて強い影響があつたといわれる父親は、恐らく「サディズムの傾向なしとしない」程嚴格な人で、後年の回想とは違つた氣持を彼は父親に對し抱いていたことだろう。ウェストミンスター・スクール (Westminster School) を經てオクスフォード大學のクライスト・チャーチ (Christ Church) に入學したロックは、在來の學問の不毛性を嘆いてゐたが、「逍遙學派の哲學以外のあるものをオクスフォードで見出した。」當時そこには後にロイヤル・ソサィアティ (Royal Society) を創設せしめる原動力となつた一群の近代自然哲學者がいた。これらの人々を中

心に展開された新<sup>ニュー・フロンティア</sup>哲學、就中その基礎をなしている原理が強くロックの心を動かした。クラストゥンはこの時——一六五〇年代の半ば——既にロックは後に「人間悟性論」を書くべき道を辿り始めていた、と考へる。ロックが勃興しつゝあつた自然哲學——それは周知の如く、なによりもまず實驗と觀察を重んじる——をまさに新しきものとして學び始めたことは、彼のビュアリタン革命に對する態度にもかゝつてゐる。即ち「彼は自國の驕然たる歴史を顧みて、人間の過誤が特に有力な二つの源に發していることを知つた。一つは傳統に對する盲目的執着であり、これは政治ないし社會生活における王黨派、研究生活における哲學者等に特にみられる誤ちである。他の一つは熱狂、即ち眞理の基礎として感情的な確信を据へることである。これは特にビュアリタンや非國教徒にみられる誤ちである。これらのいづれの態度にも反對して、ロックは満足すべきものとして自然科學をえらんだ。何故なら自然科學においては傳統に代わつて經驗が導き手となり、又理性に對する絶えざる訴えが熱狂に陥る危険を豫め防ぐからであつた。」

社會の激動、學問の不毛に對し自然科學——特にその哲學的原理に傾倒しつゝこれに應じたロックは、一六六〇年代に入るとロバート・ボイル (Robert Boyle, 1627—91) のサークルに入り、オクスフォードにおける自然科學の巨匠達と直接交渉をもつことになる。そして自然科學者としては何等特別の業績をあげることなく終つたが、一六六六年外交使節團の一員としてのクレーフエ (Craefve) への短かい旅から歸ると、他の諸種の務

めを断念して一度は醫師になることを決意し、トマス (Thomas, David) の下で醫學に勵むのであった。

一方この革命末期から王政復古初期にかけてロックが政治・社會問題を扱ったものを遺していないかというところ、そうではない。革命末期、「全人類に對する不信」を表明し、政治・社會問題について完全に絶望しているかみえた、ロックではあったが、一六五九年から六〇年代の初めにかけてトラレイションに關連して、國家權力と人民の自由の問題およびその基礎理論としての自然法論についての書簡・論稿等を書いてゐる。

「ほとんどすべてのイギリス人と同様、ロックにとつてもチャールズ二世の歸還と復位は大いなる喜びであつた。……一六六〇年當時彼は心からの君主制論者だつた」と、この時期の彼の政治思想を扱った章を書き始めたクランストンは、その評價を次のように述べてゐる。

「キングもブーンもロックが王政復古を歓迎してゐたことを理解してはいた。……王政を望む氣持が、これらの言葉〔世俗權力論』序文〕のうちに洩らされてゐるにも拘らず、フォクス・ブーンはロックが一六六〇年當時一六八八年におけると同様自由主義者だつたと信じてゐた。『ロックは當時既に後になつても決して大きく變つることのなかつた政治學上の結論に達してゐた』というブーンの考えは、彼が一六六一年ロックによつて執筆されたと信じてゐた『ローマ共和國考』(Reflections on the Roman Commonwealth)……と、この論文から引きだしてきたものであつた。……これはロックの著作ではなく眞實の

著者はウォルター・モイル (Walter Moyle) であり、モイルがこの論文の著者であることは一九一四年という以前から明らかになつていたのである。しかるにロックが一生變つることのなかつた自由主義者であつたという神話が、このような暴露を妨げてきた。ライデン以前の研究者は何人もその意義を理解してゐなかつた。」「(内・傍點筆者) しかし「一六六〇年から六一年にかけてロックはこのように王權論者、極端な權威主義者であつた」とするクランストンは同時に「數年を出でずして彼の政治上の見解は根本的に變化するのであつた」と記すことも忘れなかつた。

一六六六年から翌年にかけてはイギリス史における一つの危機の時代であるが、ロックの思想發展にとつても重要な時期であつた。醫學に専心することになつたロックはイギリスのヒボクラテスといわれたシデナム (Sydenham, Thomas 1624—89) に會い、彼と共同の仕事もすることになつた一方、その醫師という仕事縁でロックの一生を半ば決定づけた一人物に邂逅する。後のシャフツベリ伯 (1st Earl of Shaftesbury) アッシュリー・アッシュリー・クーパー (Anthony Ashley Cooper 1621—89) である。「アッシュリーこそはロックを見出し、ロックが自己の眞の天賦の才を發見するのを促した人であつた。エクスイター・ハウス (Exeter House) (ロンドンにあつたアッシュリーの館) に行く以前、ロックはオクスファードの二流の學者、經驗の少い元外交官、素人科學者、著作を出版してゐない著述家、無資格の外科醫であつた。〔しかるに〕アッシュリーの家庭に入るやロッ

クは哲學者、經濟問題研究家、熟達した醫師となつた。彼がそうなることのできた名譽の一部は、彼のバトロネであり主人であつたこの醜く矮小な貴族に歸さねばなるまい。」(6) (一) 内筆者)

そしてアシユリの侍醫であるばかりでなく、政治問題の助言者ともなつたロックは、彼三十代の半ば以降から、當時の社會の抱くりアルな問題と厳しく接するようになった。かくて彼は政治・社會問題に關しても最早單に思索の人ではなくなつた。ということとはロックがそれまでとは異つた次元で思索するようになったことを意味する。何故ならこの六十年代末から八十年代にかけては、ロックの主要思想の輪郭がほゞでき上るいわば創造の時期であるからである。この時期では政治思想形成についての克蘭ストウンの見解が特に從來の説と異なる。即ちロックの政治思想を代表する「統治論」(Two Treatises of Government, 1690) の草稿が、七〇年代末から八〇年代初めにかけての法王派陰謀事件・「王位繼承排除法」鬭争等のシャフツベリを中心とする一連の政治運動の所産であるとする克蘭ストウンは次のように述べている。

「ロックの『統治論』については、二つの間違つた考えが通説となつてゐる。その第一はそれが名譽革命を正當化するため一六八八年以後に書かれたということである。……フォクス・ブーンはロックの『統治論』第一篇が一六八一年か八二年、第二篇が彼のオランダ滞在(一六八三—一六八九年)中の最後の年に『準備され』たことは確かだと考へた。しかしこの書物の二

つの部分の論證の間に存する密接な關連はこれらが一體として又同時に『準備され』たことを示唆してゐる。讀者は『こゝに統治に關する一つの論文の始めと終りの部分』をみるといふロック自身の言葉は、「『統治論』を構成してゐる」二論文が異つた時期に書かれた別々の論說であるといふこととどうしても兩立しない。ということはこの書物が最初一六八一年頃か一六八九年頃の執れかに書かれた……ことを意味する。そして後者の日付であるといふ得る證據は實際殆どない。『統治論』が最初一六八一年頃書かれたといふことは、それが *piece d'occasion* であることを否定するものではなくて、異つた機會の作品であることを主張するものであり、革命を正當化するためそれが起つた後に書かれたものではなくして、革命を推進するためにそれが起る以前に書かれたものであることの承認を求めらるものである。ロックのこの書物がほゞ一六八一年に書かれたものであるとするのは、プロテスタント王による王位繼承を計るシャフツベリの革命的運動にこの書物を結びつけることである。」さらに抵抗權を「強調することは一六八九年この書物を出版することになつて修正補筆されたのであろうが、抵抗權についての主張はそこに最初からあつたに相違ない、何故ならそれ〔抵抗權の主張〕はこの書物の論證の中心であるから。」(一) 内・傍點筆者)

ロックのプロテスタント・プロットにおける役割は明白ではないが、政府のスパイに常につきまといわれ、一六八三年オランダに亡命した。この間一六八九年の歸國に至るまで、後に「教

育論」(Some Thoughts concerning Education, 1693)として出版された作品の母體となった書簡を故國に送り、又「人間悟性論」(An Essay concerning Human Understanding, 1690)の草稿を仕上げた。

これまでをロック思想の播種・成育の時期とすれば、名譽革命以後はその收穫・整理といえよう。彼の存命中出版された書物の殆どはこれからの時期に屬する。かくて彼の名聲は高まり、それと共に彼の著作をめぐる論争も捲き起る。しかしこの名譽革命前後から一七〇四年「私は充分に長壽を全うした。幸福な一生を過したことを神に感謝する」という言葉を遺してロックがこの世を去るまでの時期については、これまでの傳記がほぼその主要路線を傳え得ているから、本稿で繰り返す必要はあるまい。

一方、極端に祕密主義的で、その意味でも謎の哲學者とまで云われるロックの人となりにについても、興味ある情報を克蘭ストゥンは提供している。その二・三の例を述べると、戀愛などには無關係な、禁欲的な人間という傳統的ロック像は、ラヴレイス・コレクシオンに多数含まれていたラヴ・レターズによって碎かれてしまった。克蘭ストゥンはこの「理性の時代」を代表する哲學者のロマンスを詳しく分析・敘述している。<sup>(8)</sup>又ロックは金銭問題についても實に細かい注意を拂い、一つ一つの出費を丹念に記帳していたばかりでなく、例えば一六六五年西獨に赴く折に借地人が地代を収めるのを怠るといけないからといって、自分が故國を離れるのを内緒にもらったりしてい

る。<sup>(9)</sup> 権力を利用することも巧みで、一六六六年當時聖職につかず俗人としてクライスト・チャーチで醫學研究を続けたいと願っていたロックはまず當時オクスフォードの總長でもあったクラウン(Charendon, Edward Hyde, 1st Earl of, 1609—74)の政治力を利用して醫學博士の學位號を得んとして失敗するや、同年秋恐らくアシュリー——ロックが彼と知りあって間もない——を通じてであろう、國王を動かして研究生としての權利・利益・報酬は享受し義務だけ免除されることを得るのである(尤も後年ロックのオランダ亡命後同じ王によってこの身分を剝奪されることにはなるが)。そしてこのような彼の人となりはその思想にも現われてくる。例えば彼の實利的ないしは便宜的な性向は次のようなことにみられよう。衆知の如くミルトン(Milton, John 1608—74)は「アレオパギティカ」Areopagitica, 1644)で自由の名において出版の自由を要求したが、ロックはむしろ産業の名においてそれを主張したのであった。<sup>(10)</sup> (しかし同時にミルトンがそれに失敗しロックが成功したことは、ロックのその主張やそれを支える思想が單に彼個人の性向に原因するといふ難いことをも示している。)

- (1) cf. Cranston: op. cit., p. 12 & n. 1
  - (2) cf. Cranston: op. cit., pp. 39—40
  - (3) Cranston: op. cit., p. 40
  - (4) Cranston: op. cit., p. 59
- 克蘭ストゥンはこの時期のロックに大きな影響を與えた思想家としてホッブスをあげている。

(5) cf. Cranston: op.cit., p. 67 しかし克蘭ストンはこの變化のプロセスについては明確に語ってはいない。唯一ヶ所、西獨に赴いたロックからのポイルあて書簡について記した箇所で「明らかにロックはこの時既に一六六一年當時のホッブス主義的見解からはなれつつあった」(p. 82)と述べているだけである。

(6) Cranston: op. cit., p. 113

(7) Cranston: op. cit., pp. 207—8

(8) cf. esp. Cranston: op. cit., chap. 4.

(9) cf. Cranston: op. cit., p. 87.

(10) cf. Cranston: op. cit., pp. 95—7 & 99 このほかロックの人間を語るさまざまなエピソードがこの書物には含まれているが、それらと共にロックが常に信仰深い人物であったことも忘れてはなるまい。克蘭ストンによれば、ロックのキリスト教信仰の立場は究極的には國教の一翼である廣教主義のそれであり、又ロックの倫理思想は啓蒙的快樂主義とキリスト教倫理の結合——ガッサンデイ (Gassendi, Pierre) の場合と同じく——であった、と述べられる (p. 52)。cf. Cranston: op. cit., p. 124.

(11) cf. Cranston: op. cit., pp. 386—7.

最後にこの書物の特質を本稿最初の部分に既に述べたこの書物に使用された資料に関する問題を除いて、克蘭ストンのロック像について二・三まとめてみると、次のようになる。まず、克蘭ストンは従来のロック像につきまとい

いわば傳説的な幻影を、資料に則って拂拭している。その意味で彼のロック像はよりリアルで従ってダイナミックになっている。

第二はロックの思想形成における近代自然哲學の地位を相當明確に書き出し、彼をして近代思想へとふみ切らせた礎石の一つとしてこれを位置づけている。更に彼はロックにおける哲學の形成を少くとも發生史的にはこれの系として捕えている。だからこそロックが未だ自覺的には經驗論的認識論について殆ど何も思案していないと考えられる一六五〇年代半ばを以て、唯ロックが「新哲學」について熱心に勉強したのであろうという理由だけで、「悟性論」への道を「辿り始めた」と述べたのである。このようにロックの哲學のもつ科學の論理を追求するという側面を重視することは、克蘭ストンが「悟性論」の持つ分析哲學の先驅的形態としての意義を強調することに照應する。

第三に自然哲學的要素と並んでロック思想の近代化の礎石となったものとしての政治思想を積極的に評價し、從來専ら革命のアポロジストとされてきたロックが實は革命を準備・推進した思想家であることを強調する。更にこの革命的政理想およびそれを中核とする寛容論その他の社會思想をロックに抱かせた人物として、シャフツベリを重視している。

かくして「ロックは單に人間の知識を擴大したのではなくして、人間の思考方法を變えたのだ」という言葉をもって終るこの書物が、果してすべての意味でフォクス・ブーンの傳記に

「今やとって代った」<sup>(3)</sup>かどうかは速断し得ないとしても、新資料をふまえて記され、色々な意味で問題を投げかけたアトラクティブな書物ということは出来よう。そしてフォクス・ブーンの書物がこの思想家についての一九世紀ビクトリア時代の代表的ビルトの一つを示すとすれば、克蘭ストウンもまた二十世紀半ばの代表的ロック像の一つを書きえたことは確かである。

(1) クランストウンの哲學的立場は彼のもう一つの著作「自由」(Freedom, a new analysis. Lond. 1953, 2nd ed. 1954)がより明瞭に示している。この書物では歴史的方法と共に言語分析の方法がとられている。また克蘭ストウンのロックの認識論形成についての見解は、同じ年にヨルトンの著した書物とも對照されるべきであろう。(cf. Yoltan, J. W.: John Locke and the Way of Ideas. Oxf. 1957)

(2) 濱林氏も指摘しているごとく、克蘭ストウンの主張を裏付ける證據はその力が薄弱といわねばならない。濱林正夫「王政復古から名譽革命へ——ジョン・ロックの思想形成——」(水田洋編「イギリス革命——思想史的研究——」(御茶の水書房、一九五八年所収)特に三三一

頁註(1)参照。又ロックの思想形成における自然哲學的要素と政治・社會哲學的要素の關連が問われねばならないが、これについても克蘭ストウンは明言していない。これらをつなぐものとしてのロックの形而上學が殆ど明白な問題となっていない、或いは問題としないことが、この傳記の特質の一つであろうか。

(3) The Times Literary Supplement, July 12, 1957  
フォクス・ブーンは彼自身非國教徒のチャーナリストおよびアフリカの原住民保護に力を盡した社會運動家であつて、特に一八八〇年代のグラッドストーン(Gladstone, W. B.)を中心とする帝國主義的外交政策には職を賭して反對の論陣をはった人物であつた。勿論傳記作家としても定評があつたが、ブーンのような生活と思想の投影が彼のロック傳には見られ、それが克蘭ストウンの批判したごとく彼の作品の缺陷となつてゐると共に、ある意味では長所ともなつてゐる。cf. Cranston: op. cit., p. x. & Dictionary of National Biography, 2nd Supplement (1901—11) pp. 200—01.

(一九五九・五・三〇記) (一橋大學大學院學生)